むかしの高松

'95／3
第6号

“特集　古代人の生活 ～弥生人の住と食～”

みなさんは、博物館や歴史資料館へ行ったことがありますか。ほとんどの人が一度は見学したことがあるでしょう。展示室に入った瞬間、驚きと感動が見ている人を包んでしまいます。そこには教科書に書かれている歴史ではなく、いきいきとした人間の営み、昔の人々の息づかいが満ちあふれています。発掘調査においては、この感動がより一層大きなものとなって、私たちの前に現れてきます。これから、悠久の眠りからさめた遺跡や遺物を通して古代人の生活（弥生人の住と食）についてみなさんと一緒に見てみましょう。

写真(1)　様々な形の弥生土器

《住》

古代の人々はどのような家に住んでいたのでしょう。教科書等で復元住居の絵や写真を見たり、実際に復元された家の中へ入ったことがある人も多いでしょう。

竪穴住居について

地面を掘り下げて床面とした半地下式の家で、柱を立てて骨組みを作り、カヤなどで屋根を葺いていました。発掘では、このような上屋部分は残っていませんが、火災にあった住居では焼けた柱・屋根等の見つかる場合があります。平面形は、方形や円形など様々ですが、弥生時代はほとんど円形です。床面積は平均すると20㎡前後で、非常に狭いと感じるかもしれません。ところが、復元された住居の中に入ると意外に広いことに驚かされます。

弥生人は、その中で寝起き、食事など日々の生活をしていました。その姿を実際に見ることはできませんが、万葉の歌人山上憶良が詠んだ「貧窮問答歌」によりその一端を想像することができます。

「…伏いほの　曲いほの内に　直上に　藁解き敷きて　父母は　枕の方に　妻子どもは
足の方に　囲みいて　憂へ吟ひ　かまどには　火気ふき立てず　こしきには　蜘蛛の
巣かきて　飯炊く事も忘れて……
里長が声は　寝屋処まで　木立ち呼……」
（『万葉集』）

写真(2)　凹原遺跡

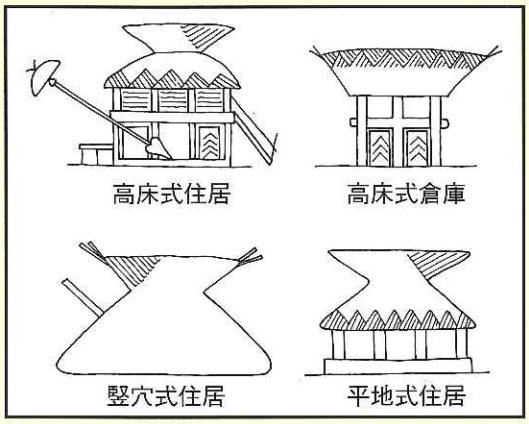


図１　「家屋文鏡」に描かれた建物

写真(3)　天満宮西遺跡

さて、住居の細かな部分について考えてみましょう。

発掘では、写真(2)(3)のような住居の凹みとして、掘りあがります。平面から見たのが図2です。

◎炉址→煮炊き　火を使っていたため、底面はやけ、その炭や焼土がのこっています。料理のためだけでなく、暖房や照明としても使われました。文字どおり家の中心的な役割をしています。

◎壁溝→排水　住居の周辺を巡る細い溝。中に入った水を排水する。さらに家の周囲に大きな溝を掘っているものもあります。

◎床面→居間　日常生活は炉址を中心とした場所で行われ、堅く踏み固められています。そして、板や、布や編み物などでいくつかの部屋に仕切っていたと考えられています。

◎ベッド状遺構→寝間　壁に沿ったところが少し高くなっている住居が時々あり、乾草や毛皮を敷けばベッドになります。

◎柱穴　柱を埋め込む穴。保存の良い時には柱の一部が残っています。

◎壁　土を叩き固め、さらに板を立てます。水分が竪穴の壁にしみださないように工夫しています。

◎出入口　家の中に光を入れる必要から南側に作ります。

竪穴住居の柱の耐用年限は、15年位であり、当時の平均寿命から考えると一生のうちに3ないし4回は家を建て替えていたでしょう。

さらに、竪穴住居は、夏涼しく冬暖かく、わたしたちが考えているよりも住み心地は快適なものだったと思われます。

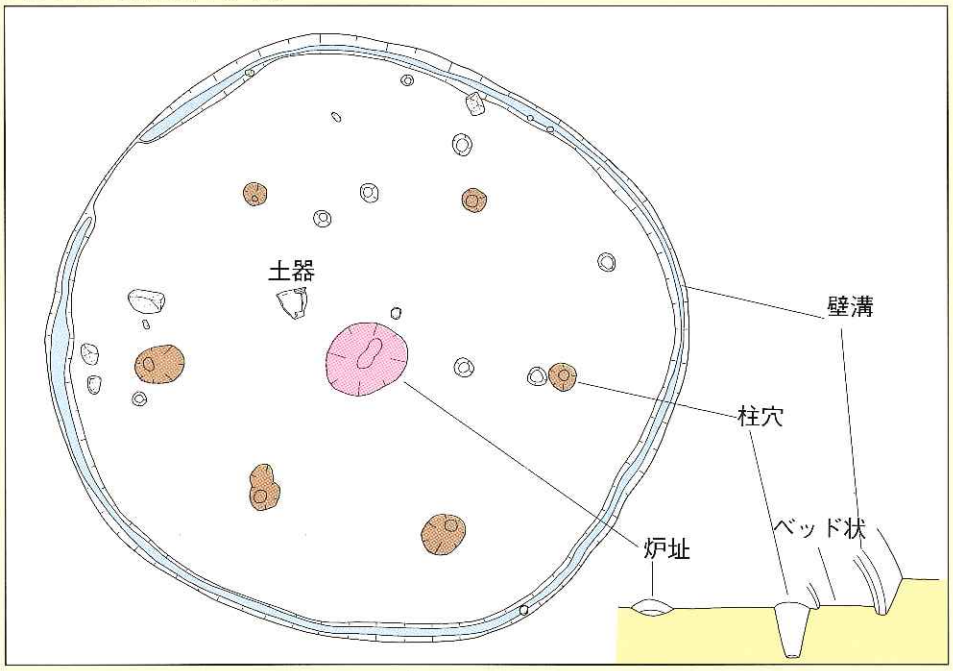
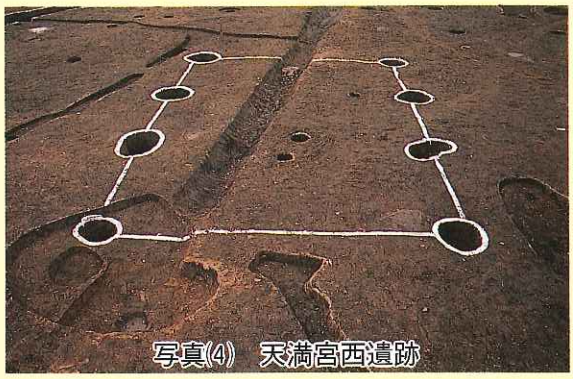


図2　竪穴住居の平面形態

掘立柱建物について

平地面を床とした平地式と床を高く上げた高床式の建物があります。発掘調査では写真(4)のように柱を立てた穴が規則的に並んでいるのが検出されます。柱の本数は４～８本です。復元した図は高床式倉庫で、石包丁で摘み取った稲穂を保管するための建物です。平地式建物は草葺きの屋根と壁で建てられた家です。



写真(4)　天満宮西遺跡

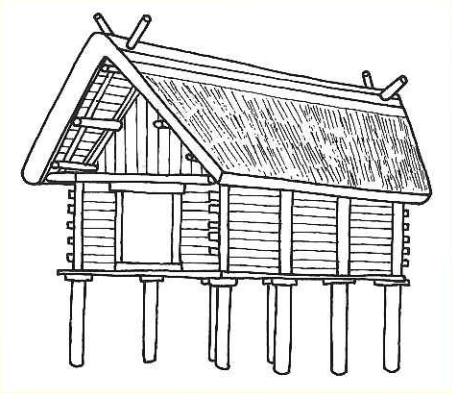


図３　復元された高床式倉庫

《食》

発掘によってたくさんの遺物が出土しますが、その中で最も多いのが土器です。その焼かれた時代・方法や紋様などにより、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器などと呼ばれています。

弥生土器は、東京都文京区弥生町で最初に発見されたことで名付けられました。

用途としては、貯蔵用、煮沸用、供献用に分けられます。（写真１）

貯蔵用－突帯文、沈刻文の紋様や丹による塗彩文で装飾する土器　壷、蓋

煮沸用－装飾していない土器　甕、甑、蓋

供献用－祭り用や日常用として使われた土器　鉢、高坏、器台

これらの土器は、地域や時期によって流行する形や紋様が異なることから、遺跡の時代や交流関係を調べる重要なものさしとなっています。

壷……お米などの食べ物を保管する。

甕……煮炊きに使われ、煮こぼれや煤が付くものが多い。

甑……水を入れた甕の上にのせて使う。昔の蒸し器です。

鉢……食物を盛ります。

高坏…神への供物や日常の食物を盛ります。

蓋……壷用の蓋と甕用の蓋があります。

壺

蓋

鉢

甕

高坏

縄文土器の例では、煮炊き用の土器の使用期間は３カ月が限度であったと言われており、土器は非常にこわれやすいものです。割れた土器は近くの川や廃棄された住居の凹地に捨て、新しい土器を補充しました。個人で土器を作るのは大変ですから、一つの村で使う一年間の土器は、枯れ枝や落ち葉などの燃料が豊富にある秋から冬にかけて、女性を中心とした村人全員の共同作業として焼かれていたと考えられます。

作ってみれば……、縄文「風」土器

高松市歴史資料館の「縄文時代、貝を煮る場面のビデオ教材」用に土器を作ったときの話です。〈土器を作るまで〉には…粘土が必要、捏ね方はどうか、ロクロ等使うか、どんな道具がいるかいらないか、焼く時期・場所・方法、燃料は？…等々あります。（中国、海南島の黎（リー）族の例などを参考にしました）

① どんな土器を作るか？

現在のナベにあたる深鉢＝甕（かめ）を作ることにしました。モデルは、今では国道11号線東バイパス道路になっている、高松市居石遺跡の、縄文晩期中頃（約2700～800年前）のものとしました。

② 粘土の入手は？

陶芸店で買っても良いが手近なところで…。居石近く、当時発掘中の浴・長池Ⅱ遺跡の弥生時代の水田の下（地下１ｍ）によい粘土がありました。

③ 粘土の下ごしらえ（生地作り）

a．子どものこぶしほどの塊にした粘土を約１ケ月、天日乾燥。

b．甕２、３個分の量をカナヅチでメリケン粉のように見えるくらい細かく砕きフルイにかけます。この作業で約半日。

c．〈つなぎ〉の役目をする砂が必要で雨垂れ落ちの土＝砂を２種類のフルイにかけ、径１～２㎜にそろえ、粘土粉に対し10％余りの量を混ぜます。

d．水を加えて、約半日、根気よく捏ね、ラップに包み、二日ほどねかせて素地土ができました。

④ 土器の成型

a．作業台の板切れの上に、ハンバーグのような形に整えた粘土を置くと「底」ができます。

b．直径３㎝、長さ１ｍほどに伸ばした粘土棒から、幅５㎝、厚さ1.5㎝、長さ50㎝ほどの粘土帯を作り「底」のまわりに「輪」にしてくっつけます。２～３段目と「輪」を大きくしながら積み上げ、上になると小さくして大まかな甕の形を作ります。（輪（わ）積（づ）み法）

c．河原で拾った餅の形の石を左手に持ち甕の内側から、志度の海岸で取ってきたバカガイを砥石で磨いたものを右手にもって外側からあて、台のまわりを移動しながら整え、表面を磨きあげます。甕の口（口縁部）を折り返して薄くひろげ、上から見て四角になる「居石型」に竹ベラで切って仕上がりです。（粘土ひもを巻き上げる方法もあります）

⑤ 乾　燥

室内で一週間、その後天日で二日かけました。(これは不十分でした)

⑥ 焼き上げ

風のない日をえらび、広い空き地の、予め火を焚いて乾燥させていた土の上に土器を置き、その上に燃料の薪をもりあげ、約一時間焼きました。(薪は半年前の調査地から持ち帰った樹木を使用。これも乾燥不十分でした)

⑦ できばえ

砂の量が少ないのと、土器や薪に残っていた水分のため、焼く途中で3個の内の2個ははじけて壊れました。完成品でアサリ・スープを作りました。野外の石組み炉で焚き火で沸騰させるまでに、45分間かかります。味はグー。

ハンセイ……土器と薪は、焼く前に完全に乾燥させること。特に、土器は一ヵ月以上乾燥させる必要があります。　(S)

《質問コーナー》

Q. 一軒の竪穴住居には何人住んでいたのですか？

A. 家族単位で住んでいたと考えられ、人数は4ないし5人位だったでしょう。千葉県の縄文時代の貝塚において、竪穴住居の中で死亡した4人家族の人骨が見つかりました。さらに、「貧窮問答歌」では家族構成が本人、父母、妻子の5人です。

Q. 古代人の寿命はどれ位だったのでしょうか？

A. 縄文時代から明治にいたるまでの長い間、人間の平均寿命は40～50歳でした。現在と比較すると非常に短い人生だったのです。

Q. どのような素材の服を着ていたのですか？

A. 日本に機織り技術が伝わったのは弥生時代であり、絹織物をはじめとする多くの布が作られました。それ以前の縄文時代では、自然に成育する植物の繊維を利用した編布がありました。冬の寒い時には、その上に毛皮を着ていたのでしょう。

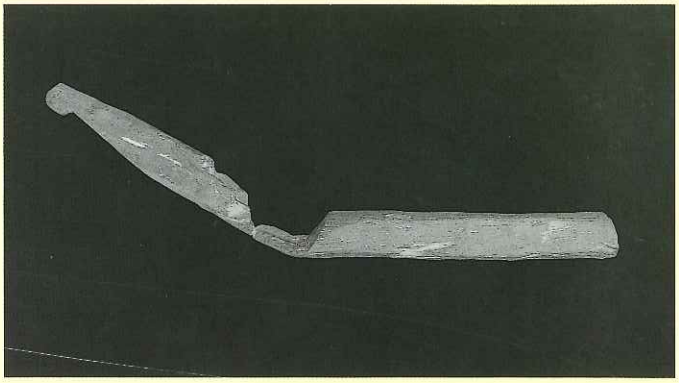
Q. トイレは？

A. 川に流したり、単に穴を掘っただけの簡単なものと思われますが、高松ではまだ見つかっていません。しかし、最近、奈良の平城京で発見され、穴の中の土を分析すると、寄生虫が見つかりました。

古代人の祈り

古代の人々は、現代人よりはるかに自然に対する畏怖(いふ)の念を強く持ち、明日の狩りの収穫を願い、豊作を祈り、子孫の繁栄、ムラの安泰を祈願しました。そのために使われた祭祀の道具がいろいろ出土しました。

船形木製品



鳥形木製品

編集後記

日常のあらゆる面で電化され、スイッチを押すだけの暮らしをしている現代人にとって、古代の生活はなんと不便で貧しいものなのかと感じるでしょう。しかし、果してそうなのでしょうか。もし、今、電気がなくなると私たちは生活することができるでしょうか。古代の人々は、自然の恩恵を受け自然の中で暮らし、生きることにあらゆる努力を費やしていました。私たち現代人は、今こそ、彼らの生き方を振り返ることが必要なのかもしれません。

（N）

むかしの高松　第6号

1995. 3. 31

編集／高松市教育委員会文化部文化振興課

高松市番町一丁目8番15号

☎（39）2636

発行／高松市教育委員会

印刷／㈱　中央印刷所